

第十九章 戦車イエロー・タイガー

ウクライナー共和国でロシアに国境を接するドツク州でクリム海に面する港湾都市マリンポリン市にあるウクライナー最大の製鉄所で半ばロシア軍の人質になっていた市民が奇跡的な脱出に成功した。その製鉄所には黄色と黒の縞模様のひときわ目立つ戦車一両がロシア軍戦車隊と対峙する。

「イエロー・タイガー戦車？」

遙か上空の宇宙戦艦でイリが驚く。通常一本しかないはずの大砲が三本もある。三連装レーザー砲だ。砲塔上には二連装レーザー機関銃が上空を警戒している。

百両以上のロシア軍戦車の車列がイエロー・タイガーに向かう。狭い道路を幅広の戦車が一列で並んでいる。したがって攻撃可能なのは先頭車だけだ。その先頭車が至近距離から発砲する。当然命中するがイエロー・タイガーは微動だりしないし、かすり傷を負うこともない。

逆にイエロー・タイガーの三連装レーザー砲が火を噴く。先頭から一〇両目ぐらいまでの戦車は瞬時に消滅する。その後ろの百両近い戦車をレーザー光線が串刺しにする。爆発する戦車もあれば列から離れてダラダラ走る戦車もある。陸戦で縦列体勢の戦車隊が全滅することはあり得ないがロシア軍戦車隊は一瞬のうちに全滅した。

イエロー・タイガーは少し離れたところを同じく縦列体勢で行進する別のソシア軍戦車隊に近づく。今度は真横から攻撃する。全滅を目の当たりに狼狽えて逃げようとするが距離を詰めて隊列を組んでいるので身動きがとれない。

イエロー・タイガーは砲塔をゆっくり回転させてレーザー砲を発射する。ほんの数秒ですべての戦車が蒸発するように消える。すさまじい攻撃力だ。瞬く間に数百台の戦車がイエロー・タイガーの餌食となる。マリンポリン市のソシア陸軍は壊滅する。

この黄色と黒の縞模様の戦車はまるで虎のような凶暴さを持っている。次の獲物を狙ってうなり声のような騒音を立てながら戦車の残骸を蹴散らしながら前進する。今度は空から対戦車ミサイルを満載した十数機のソシア軍戦闘機が現れる。イエロー・タイガーにとっては単なる獲物に過ぎない。ミサイルが発射される直前に二連装レーザー機関銃が戦闘機を捉える。

何事もなかったようにイエロー・タイガーはソシア軍が掌握したと主張するドツク州の激戦地に向かう。

*

「今度は猛虎」

イリがため息をつく。加藤が復唱する。

「トラ、ウシ、ゾウ、いえマンモス」

「やれやれ」

「次は？ 百獣の王？」

加藤にイリが真面目ぶって応える。

「ハリネズミかも」

加藤に代わって榊が首を振る。

「いくらなんでも……迫力がない」

「そんなことないわ。チクチクよ。トラだつてハリネズミを食べようとはしないわ」

ソシア軍の戦車や装甲車は砲塔を後部に向けてまっしぐらにソシア領に向かって逃走している。戦意を喪失しているのは明らかだ。それでも必死に走り続ける。我先に逃げようとするから接触して団子状になって止まってしまふ。

「戦車を放棄して歩いて逃げようとしているわ」

「軍人の敵前逃亡は死刑になる。ましてや独裁者プチレンコンなら裁判せずに銃殺刑にするだろう」

「何とか助けられないの」

意外なイリの言葉に榊も加藤も返す言葉を失う。イエロー・タイガーが三連装の砲身の先端がわずかながら上がる。そして三本のレーザー光線が発射される。ソシア軍の戦車や装甲車、そして降車して逃げ出すソシア兵の頭上を光線が通過する。

「外れた！」

イリが驚く。

「いえ、外したんだ」

加藤が否定すると榊が頷く。

「汚れた布を振っています」

ソシア軍の兵士は白旗を振っているつもりだ。足下に武器が転がっている。イエロー・タイガーは速度を落としながら近づく。もちろん砲身の照準はずらさずに。

全員が両手を上げている。意外な大きな声がある。もちろん上空でこの様子を見つめる宇宙戦艦からの音声ではない。

「ソシアに帰れ」

加藤が上空に銀色に輝く球体を発見する。

「どうやらあの球体からの音声です」

たまたらずソシア軍司令官が拡声器で叫ぶ。

「帰れない。銃殺刑が待っているだけ。降参します」